ケースであるが、白人女性から生まれた最初の混血児は、記録によれば、一八〇七年とされている。

著者は「カナダ北西部」の土地、地形の広大さを英国の自然の地形と比較して、イギリス人にとって、この地域の自然風土の中で生活する原住民の時間と空間の観念を正当に把握することの困難さを述べているが、ここではすべては、存在のより大きな種族のために予定されてきたように思える。風土性の現われる場所においては、人間は単に一般的に、「過去」を背負うのではなくて、特殊な「風土的過去」を背負っているのである。

さて人間の存在において最も手近に見出されるものは道具である。道具とは、「……するためのもの」であり、この「……するためのもの」は、そのものが使用せられる目当てとしての、「何のために」に対して内在的な関係をもっている。

一八〇三年にイギリスの毛皮商たちが、原住民の欲しがる「鉄砲」、「銅製のやかん」、「ナイフ」、「はがね製斧」、更にアルコール、タバコの嗜好品などをもって、カナダ北西部の北部低地をめざし、ハドソン湾に侵入してきたのは、この「何のために」に対して内在的関係を示すものである。

白人たちは、原住民から少しでも多くの毛皮を欲したのである。そのために、原住民にとって多大の魅力のとりこであった文明の利器（ヨーロッパ製品）を交換条件にして、彼等と貿易取引をし、イギリス市場に毛皮の多くを売りさばくのが目的であった。結果は予想以上に拡大し、ヨーロッパの文明の利器は急速に北西部の奥地へとひろまった。北方原住民は、ヨーロッパ人を眼の前にする以前に、白人の文明の利器に馴じみができた。奥地のインディアンの手に渡るまでに、値段が十倍にはね上った製品もあった。この結果、イギリス系貿易会社は、相当の利益を得たが、一方この毛皮貿易により、急速に原住民の固有の生活は破壊されていった。更にセント・ローレンス河から南水路を経て、フランス系の毛皮貿易会社が、イギリス系会社と対抗して、ここにやってきたため、両者の貿易競争は一層悪化の一途をたどった。河と湾に接近している土地の毛皮は急速に奪い取られ、そのため毛皮商は奥地へと移動して、遂にマッケンジー河と太平洋のコロンビア河、更に北極圏にまで、その手をのばしていったのである。

1811年当時のカナダ

この毛皮貿易にとって、白人毛皮商と原住民との交流は必要不可欠のものであった。この交流の過程には、「文明」と「原始」との交流による人間社会のあらゆる局面が展開されている。結婚、贈物交換、言葉の教授、病人介抱、学校開設など、これらの結びつきの例は、すべて双方の貿易取引の代替として用いられた。

原住民の間にヨーロッパ製品の需要が増大するに比例して、この地方の動物の数が減る結果となったことはいうまでもない。白人達は交易の基本的物価単位として「海狸（ビーバー）」を採用したので、ビーバーは絶滅状態にまで追い込まれたといわれる。双方の貿易交渉は、一種の儀式の偽装の中に行われた。その中で白人側から提供されたアルコールは、両者の生存と繁栄にとって、害毒と有用性の二面を兼ね備えていた。（参照四十六頁、四十七頁）いずれにしても、侵入してきた白人達は、社会的に原住民との交流の絆を確かなものとした。社会組織としての両者は、風習、道徳、法律などの掟の下に、予想以上に密接に結合し、ここにおける共同社会の形式として存在しつづけた。

自然条件の最も苛酷な「ノース・ウエスト」では、毛皮貿易にとって一番肝心なことは輸送ルートと輸送機関の確保である。（これは第四章で扱われている）この地域へのルートには、㈠セント・ローレンス河〜グレイト湖のルートと㈡ハドソン湾から陸地へ侵入する二つのルートがある。毎夏ハドソン湾会社の船が直接ロンドンからハドソン湾に入ってきた。専用船（テンダー）は、入湾した船の船荷の三分の一から五分の二を一回に運ぶことが可能だった。またカヌーは輸送機関として大いに利用された。普通五人の乗組員で、船荷は三千ポンドまで可能であり、静穏な天候では一時間に六マイル疾走できた。当時の記録によると、カヌー船団が、フォート・ウイリヤムからフォート・バーミリオンまで到着するのに二ヵ月を要したといわれる。また輸送機関には「急行便」（参照六十九頁）、荷物運搬用そり、荷馬車、馬、バッファロー、犬などが用いられた。

この書には、随時、このような記録文書が引用されているので、実証性が極めて高く、正確な知識が得られるのが利点である。

第六章は、ヨーク・ファクトリー、チャーチル・ファクトリー、フォート・ウイリヤムが挿絵入りで、当時の状況が具体的に説明されており、第七、八章は北西部の各カントリーの地誌的説明が加えられている。

この書の記述、地図作製の表現方法の特徴は、この時代の感情を喚起させるように工夫がみられることである。カナダ北西部における毛皮商と原住民との貿易記録の歴史的経緯が、自然、交易、輸送、住民など、全般的風土の克明な観察描写により、読者に十九世紀初頭における北西部の有様を鮮明に印象づけているのは、著者の実証的な手法が成功したものといえよう。

脚注は著者のものであるが、引用文の一部には最近の学者からのものもある。混乱を避けるために、地名は今日の綴りのものが使用されている。今後、この分野の研究にとって、この書が研究書の書誌の一つに加えられることは間違いなく、この書の果す役割、貢献は少くないであろう。